

聖書：ローマ4：1～8

説教題：不敬虔な者を義と認め

日時：2015年6月28日

パウロは1章18節から3章20節にかけて、罪の下にある人間について語った後、3章21節からいよいよ「信仰による義」について語り始めました。イエス・キリストを信じる者に神が与えてくださる無償の義です。これは決してパウロが作り上げた新奇な教えではありません。これは長い時代に渡って啓示されて来た聖書すなわち旧約聖書のメッセージと一致するものです。パウロはそのことをこの4章で論証して行きます。そのために今日の箇所では旧約における二人の人物を取り上げます。一人はユダヤ人の父アブラハム。彼からイスラエルの歴史は始まりました。あらゆる意味で彼はイスラエルの模範となる人、また象徴的な人物です。もう一人はダビデ。イスラエル王朝時代の最も偉大な王です。やがて王なるメシヤはこのダビデから出ると言われていました。この二人についてパウロは検討して行きます。

まず最初はアブラハムの場合です。彼が神に義と認められ、祝福を受けたのは彼が良い行ないをしたからでしょうか。決してそうではありませんでした。2節に「もしアブラハムが行ないによって義と認められたのなら、彼は誇ることができます。しかし、神の御前では、そうではありません。」とあります。では聖書は何と述べているか。パウロは3節で創世記15章6節を引用します。「それでアブラハムは神を信じた。それが彼の義と見なされた。」アブラハムは主の言葉を頂いて、カルデアのウルから出発しました。彼の家は異教の神を拝む偶像礼拝の家でした。そして創世記12章で「あなたを大いなる国民とする」という主の約束を受けていました。しかし創世記15章の時点になっても、まだ子どもを与えられていませんでした。そんな中、主はアブラハムを外に連れ出して言われました。「さあ、天を見上げなさい。星を数えることができるなら、それを数えなさい。」そして言われました。「あなたの子孫はこのようになる」と。この直後に創世記15章6節の言葉が記されています。「彼は主を信じた。主はそれを彼の義と認められた。」と。これは信仰義認の教理に関する重要な御言葉です。ここで言われていることは何でしょうか。それは義と認められるという祝福は「信仰」と関連付けられているということです。それは行ないとは関連付けられていないということです。

アブラハムの生涯において有名なエピソードは色々ありますが、特に衝撃的なのはモリヤの山で一人子イサクを奉献した記事でしょう。創世記 22 章に記されています。ユダヤ人の中では、アブラハムはこれほどに神に従ったので、神に義と認められ、神からの祝福を受けたのだとする理解が一般にあったようです。しかし今見た創世記 15 章 6 節がはっきり述べていることは、アブラハムは何かを行なったために義と認められたのではないということです。彼は「信じた」ことを通して義と認められたのです。

4 節にあるように、もし彼が何らかの働きを行ない、祝福を得たのなら、それは恵みとは言わず報酬と言います。それは相手に要求できるものです。しかし創世記 15 章 6 節に、そういう原則は見られません。アブラハムに見られる原則は、5 節に記されている通りです。「何の働きもない者が、不敬虔な者を義と認めてくださる方を信じるなら、その信仰が義とみなされるのです。」

「何の働きもない者」とは、神から賞賛を受けるにふさわしい働きをしていない者ということです。むしろここに「不敬虔な者を義と認めてくださる」とあります。これはアブラハムにも当てはまるのでしょうか。アブラハムも不敬虔な者と言うべきなのでしょうか。もちろん人間的な観点から言えば、アブラハムに優れた点はたくさんあったでしょう。しかし 3 章 20 節に「律法を行なうことによっては、だれひとり神の前に義と認められない」とありました。あるいは 3 章 23 節に「すべての人は、罪を犯したので、神からの栄誉を受けることができず」とありました。そういう意味ではアブラハムも神の前では「不敬虔な者」と呼ばれざるを得ない者です。ところがそういう者を神はただ恵みによって義と認めて下さる。アブラハムは主をそのような方として信じたのです。彼は創世記 15 章の「あなたの子孫は空の星のように数えられないほど多くなる」という主の約束を単に地上的・人間的な意味でだけ理解したのではありません。すでに彼は創世記 12 章 3 節で「地上のすべての民族は、あなたによって祝福される」という約束を頂いていました。やがて自分から出る一人の子孫を通して、神は全世界に対するみわざを進められるという約束です。そしてイエス様はヨハネの福音書 8 章 56 節でこう言われました。「あなたがたの父アブラハムは、わたしの日を見ることを思って大いに喜びました。彼はそれを見て、喜んだのです。」つまりアブラハムはやがて神が与えてくださるメシヤとの関連でこの約束をとらえていました。アブラハムはこの約束に接して、これは私のこれまでの歩みに対して、神が当然支払うべきものだなどと考えていません。神の御前で自分取るに足りない貧しい存在、不

敬虔な者です。なのに神はこの私を受け入れ、私への約束をこのように更新し、私を祝そうとしてくださっている。これは神が不敬虔な者をただ恵みによって義と認めてくださるからに他ならない。アブラハムはそのように主を信じたのです。そしてその信仰を通して、彼は実際に義と認められる祝福を受け取ったのです。ここにあるのはただ信仰だけです。行ないはありません。何の働きもない不敬虔な者を義と認めてくださる方をただ信じることを通して、アブラハムは義と認められる祝福を受けたということを創世記 15 章 6 節は示しています。

二人目の事例はダビデです。6 節に「ダビデもまた、行ないとは別の道で神によって義と認められる人の幸いを」とあります。理屈上では行ないによって神に義と認められることもあり得ます。律法を完全に守れば神は義と認めてくださいます。しかし現実には不可能です。罪の下にある私たちは誰一人、律法を完全に守って 100 点をもらうことができなくなったからです。ではもう誰も義と認められないのか。そうではありません。ダビデもまた、行ないとは違う道で、神に義と認められる道があると証言しています。その幸いを歌った歌があるのです。それが 7~8 節で引用されている詩篇 32 篇です。ダビデはここで「不法を赦され、罪をおおわれた」時の経験を歌っています。果たしてダビデはどんな罪を犯したのでしょうか。ご存知の通り、ダビデは姦淫の罪を犯し、また人の手を使って彼女の夫を殺すという殺人の罪を犯しました。旧約聖書に見る最も衝撃的な罪の一つです。もし行ないによってさばかれるなら、こんなことをした人は間違いなく地獄に行くしかないでしょう。ところが何と「行ない」によってではなく、「別の道」で義と認められることがある！と述べています。本当にそんなことはあるのでしょうか。ダビデはその幸いを詩篇 32 篇で歌っています。彼は罪を隠していた時には非常な苦しみが自分の上にありましたが、主に告白しようとした時に、主が赦してくださったという驚くべき経験をしました。そして神が救いの歓声で私を取り囲んでくださったということを 32 篇 7 節で述べています。

ある人はここでダビデが述べていることは、罪が赦される幸いであって、義と認められることとは別ではないかと思うかも知れません。確かに「罪の赦し」と「義と認める」という祝福は、分けて考えることができるものです。少なくとも同義語でないことは確かです。しかしパウロがこのように述べていることから分かることは、「罪の赦し」と「義認」は一つのグループにまとめて考えられるということです。聖書によれば、神はある人の罪は赦したが、義と認めてはいないという状態はありません。こ

の二つはひとつながりのものとして聖書は述べています。神は私たちの罪を赦す時、同時に私たちを義と認めるといふ祝福にも生かしてくださるのです。罪の赦しと義認はワンセットのことなのです。

このような義認の祝福は行ないによらないということを詩篇 32 篇のダビデの言葉は示しています。彼が義と認められたのは、立派に歩んだからではありません。それはただ「恵み」によったのです。ただ「信仰」によったのです。ダビデはこんな罪を犯した自分が、その不法を赦され、罪をおおわれ、主が罪をお認めにならないばかりか、逆に義と認めて下さるといふ世界があることを歌い、その幸いをこの詩篇において証言しているのです。

この旧約時代の二人の人物を見て分かることは、旧約においても新約においても、神の救いの方法は全く同じであるということです。旧約時代の人々は律法を守ることによって救われ、新約時代の私たちはキリストへの信仰によって救われるというのではないのです。アブラハムもダビデも、行ないによらず、ただ恵みにより、信仰を通して救われました。不敬虔な者を義と認めてくださる神を信じて義と認められる祝福にあずかりました。これが神が私たちに対して持っているただ一つの救いの方法なのです。

以上の御言葉を通して、今朝改めて驚きを持って心に刻みたい言葉は、5 節の「不敬虔な者を義と認めて下さる」といふ神のお姿です。神に義と認められるために必要なのは、いくらかの私たちのましな状態+信仰ではありません。私たちのありのままの姿では神に義と認めてもらえないため、信仰が必要なのは言うまでもありませんが、信仰+少しはこれを受けるにふさわしい生活をしていること、が求められているわけではありません。何とここに言われているのは、「不敬虔な者を義と認める」といふことです。ここに全聖書の中でも最も光り輝く福音があるのではないのでしょうか。

神の前で調べられれば、私たちはみな口に手を当てざるを得ない者たちです。ダビデは姦淫と殺人の罪を犯しました。私たちは彼を見て、「私はそこまでひどいことはしていない。だから私はまだ彼よりましな人間である。」と言えるのでしょうか。いや神の前では五十歩百歩でしょう。むしろその他の多くの点で私たちはダビデよりもっともっと責められなければならない者でしょう。しかしこのような良いところが全くない不敬虔な者を、神は恵みによって義と認めてくださる。どのようにしてそんなことが可能でしょうか。それはただイエス・キリストによってです。Ⅱコリント 5 章 21 節：

「神は、罪を知らない方を、私たちの代わりに罪とされました。それは、私たちが、この方であって、神の義となるためです。」 神は罪を知らない聖いお方キリストを私たちに代わって罪とされ、この方をさばかれました。そして反対に神はキリストが獲得された完全な義を、この方により頼む私たちに転嫁し、その私たちを義と宣言してくださるのです。私たちがこれまでどんなにひどい罪を犯して来た者であっても、消したくても消せないあれやこれやの過去に犯した罪のために心痛め、悩みの内にあっても、不敬虔な者をただ恵みにより、イエス・キリストにあって義と認めてくださる驚くべき神を信じることを通して、私たちは神の前に本当に義と認められるのです。そういう福音を神は私たちに与えてくださっているのです。この福音を感謝して、私たちは自分の行ないによってではなく、ただ信仰によって神に近づきたいと思います。不敬虔な者を義と認めてくださる恵みの神に近づきたいと思います。神はそのように信仰によって近づく者を、アブラハムと同じく義と認めてくださいます。その人はアブラハムやダビデと同様に、神に豊かに祝福され、愛され、地上の生涯を経て、やがての日には栄光の御国に入るというこの上ない幸いな歩みへ導いていただくことができるのです。